

祝

2019年5月 東京大学博士号(学際情報学)取得

高木紀久子さん(取得時59歳)

【論文テーマ】現代美術家による作品コンセプトの生成プロセスの解明

アーティストに「神様が降りる」メカニズムを科学してみた

■空からアイデアが降ってくる訳がない

高木紀久子さんは多摩美術大学出身。アーティスト活動と並行して、専門学校でデザインを教えてきた。多くのアーティストは、次の作品に対して苦しみ苦しんでいる中、急に光が見え、そこからはスイスイと創造的な新作ができあがってしまう、そんな経験をしている。「神が降りた」と表現する者もいる。創作の課題に取り組む学生たちも同様だ。一部の天才だけにあるスイッチではない。ましてや空からアイデアが降ってくる訳はない。そのメカニズムを知りたかったが学術的資料はなく、高木さん自身が研究することになった。門を叩いたのは、科学と芸術を認知科学の領域で扱う東京大学学際情報学府の岡田猛教授。入試面接では「非常に面白い反面、捉えにくいことをやろうとしている」と言われた。

■「ずらしが想定外のずれを生む」

アーティストの内的なものをどう捉えるか。現代美術作家の篠原猛史さんが、東大の駒場美術博物館で展覧会をやった際の、企画から展示まで約10か月、13回に渡るインタビューが研究室にあった。全く別の研究のために録られたものだったが、独特の表現や用語がネックとなり、お蔵入りになっていたものだ。それが、同じアーティストとしての立ち位置から読める高木さんには宝の山だった。なぜこう言い方になるのか、手にとるようにわかった。その内面で起きていることも非常に面白かった。

「気づきや発見は、突然神様が教えてくれるものではなく、プロセスを経て漸進的に進むのです。一

般の人がご飯のおかずを考えるとときに使う認知プロセスを使っています。それと、岡田教授が発表した『類推的ずらし』。新しいものを作ろうと既存のやり方の一部を変更する認知プロセスですが、私は『ずらしがずれを伴う』ということ、修士課程の1本目の論文の中で主張しました。想定外の、偶然生じたずれが新しい発見につながるということ

です。毎日の小さなずれが、ある日、はっと気がつく大きなずれを生じ、それを見て驚く。一般人はその驚きを失敗と解釈しやすいが、アーティストやデザイナーはそれをうまく利用します」

■最初の論文が後押ししてくれた

苦勞したのは、それを認知科学としての方法論で明らかにし、発見を証明すること。心理学や統計に関しては大学院の授業だけでは間に合わず、1、2



現在準備中の(GLLC博士の会)の幹事会にも出席。「参加者にも財団にも宝物になるのではと期待しています」

年生の授業もとって基礎からやり直した。仕事をしながらの論文は時間的には厳しかったが、1本目の論文が後押ししてくれた。その論文は、テーマの新規性からあちこちで引用され、国内外の学会からリアクションをもらった。それが自信になり、中途半端で終わらせられない理由にもなった。

■知見を活かせるポジションに

修士課程も入れて博士号取得まで足掛け8年かかったが、それには理由がある。2017年、東大で初めて芸術関係の実践的な授業や連携研究を行う、東京大学芸術創造連携研究機構の開設に向けて準備が始まった。機構のスローガンは「アートで知性を拡張し、社会の未来を開く」。科学的研究においてイノベーションを起こすためのヒントや基軸が、アートにあると考える7つの研究科が、文理横断で取り組むことになった。高木さんは、仕上げ直前の博士論文を棚上げて単位満期退学、機構の運営者兼特任教員として就任した。2年後の今年5月、博士号取得と機構のスタートはほぼ同時だった。

「一般の人も日常使っているプロセスなので、ぜひ創作をしながらビジネスや研究にも生かしてほしいです。また美大卒業後も頑張って作家活動を続けている方たちに、そういうプロセスがあることを知ってもらい、創作支援につながればと思います。」

松田妙子先生がそうだったように、研究の場では年齢は関係なかったです。むしろ、何のために自分が大学にいるのか明確なところが、財団の支援対象になる社会人学生には強みになりますよ」